



往乃物志
如
錄

9
3873
3



門 9
番 3873
巻 3

蛙の物真似巻之三



目録

諸花の意氣込

敵役此發明

蛙

早稲田大学 蔵
25.11.14
赤



蛙の物真似巻三

克齋主人謾編

徳藝純意氣込

四海浪静みて國を勤るぬ時津風枝を
 形々ぬけ沛代り。生れあひし力乃
 幸。文學。軍學。諸藝。技術の末まじも
 それく乃師あると心を登してかきひ
 けくせんがハ何の道みも一藝ハ上達
 乃名々そとけくふものなり。藝ヲ集
 録及六ふけて唯形ふより賢人と稱人

といつては。世若くは天下治平形にして彼ふ
 だ。國戦をいふては軍陣のセハ。三折
 ハ士。くもものは。いふ。み及。だ。民の類。あ
 ても。安堵のおと。ひ。形。ま。れ。は。只。一。日。ま。る。の
 世。上。り。り。さ。く。能。書。和。漢。の。才。人。音。樂。を
 の。は。う。法。及。其。進。人。多。し。志。ん。は。今。の。世。に
 多。く。は。く。て。版。食。て。寝。て。起。る。こと
 づ。り。り。免。て。な。ま。る。ハ。穴。口。掃。し。世。若。源。の
 半。若。軍。學。子。一。心。を。志。の。如。く。書。簡。乃

才。免。成。ぐ。く。鬼。一。法。眼。が。娘。と。停。路。間。り
 私。語。り。り。鬼。一。が。中。点。の。捷。と。少。す。せ。
 寶。花。一。に。多。る。秘。書。と。夜。等。に。並。す
 み。せ。り。り。や。その。書。ハ。今。の。六。韜。と。い
 つ。も。そ。の。書。り。り。牛。若。軍。法。龍。乃。て。龍。乃
 雲。と。は。く。く。く。く。と。密。と。破。り。り。利。と。碎
 粉。の。戦。大。利。と。は。終。り。り。その。功。と。立
 ら。ま。り。鬼。一。が。娘。の。お。と。ひ。つ。て。り。り
 ず。ぐ。み。軍。法。破。り。り。今。の。書。今。ハ。古



器具めては匠を成すに匠人も有り。
宜形り。鳥銃乃術弘まる。責合團利
合多造能り。火矢大筒めて赤漢を
以て近代乃匠及好匠人心より。その
法くくけ及心と用ふものも果敢が
出来。多あ一海に射まは是を
射と。たのまあり。かばは故
り。まあり。めて中まて格する
このはまれ形り。鉄炮とあり。ま

り。ハ何れぞ。畢竟鉄炮乃大業あり。
弓道も油断出来。むの。名人も
形さ成へ。結句揚弓に名人あり。近
世此一中なま。屏風のあら
乃的を外さ。これ心り。成へ。
成ほして候り。事々。事形。を
を法く。ま。はく。ま。あり。
又馬術も小笠原大坪。八条。その末。む
行流。ま。み。馬用馬軍

馬など宗方多くあるが中みも近世
馬場とよと才一と。あまの活足も筋を
断てあをととせ。船をちうつ。それを
業馬の宮上と。黄令板十板は費
買と形は。豈性昔は生好抄墨の正
名馬何ぞめけ形とんや。うさうの馬ハ戦場
へ向て。馳駈せんこと中くおひひも
び。いまも心ある人乃。野駒を求てのり
は。平生の食う。茶糖を食せ。軍馬

第一は立居る事。実みおる人。一掃礼
ハ人根え形り。鸚鵡克もの。ととを虎鳥
をと。おとと。狩とよく。茶碗で引うけ。その
まて。ととと。獣とと。形は。人。ハ礼義
ある。ゆ。う。と。と。わ。う。あ。あ。以。形り。禮ハ
時。一。形。今。も。於。堂。上。の。職。原。地。下。は。実
た。と。あ。る。形。ハ。不。知。ハ。あ。る。魚。う。う。は。小。さ。業
礼。和。礼。も。多。ハ。省。名。と。無。実。用。な。こと。ハ。ま。く
形。一。恒。令。ハ。と。宗。上。誰。後。ハ。同。宗。あ。て。も。今。ハ

乃此まがてと調子よくすまゝて。國の
私運を先知しき人有り。今も僅か
大内よりその蹟のころとんと。邊鄙
ハちかるとの如く。唯存出家の教とあり
太平樂。五常樂。越后樂。など。後義の
間乃相言し。志らんて。嬌鼻小兒を招
ぬ。ハ口惜きことあり。抑又茶茶の
流す下み。志らんぬ。此骨如く。東山
どの東求堂より。て教を授け。まがては

茶茶教。物茶者。を移ら。けり。と。と。と。と。と。
有。り。用。ひ。ら。ま。り。と。殊。光。千。の。利。休。
紹。鴻。古。田。織。部。た。と。出。て。高。上。り。
志。形。一。ず。益。地。具。に。志。礼。を。は。け。
空。作。し。ぬ。不。淨。の。古。志。と。れ。集。ま。り。
乃。茶。後。と。志。む。古。織。も。物。教。あり。と。益。
や。の。の。の。ま。が。て。も。今。織。部。と。し。名。を。後。
さ。し。し。ハ。手。物。と。傷。ふ。人。も。あ。る。づ。ま。れ。ど。
侍。賢。つ。乃。夜。軍。み。蒲。田。兵。衛。が。鞍。に。氷。柱。

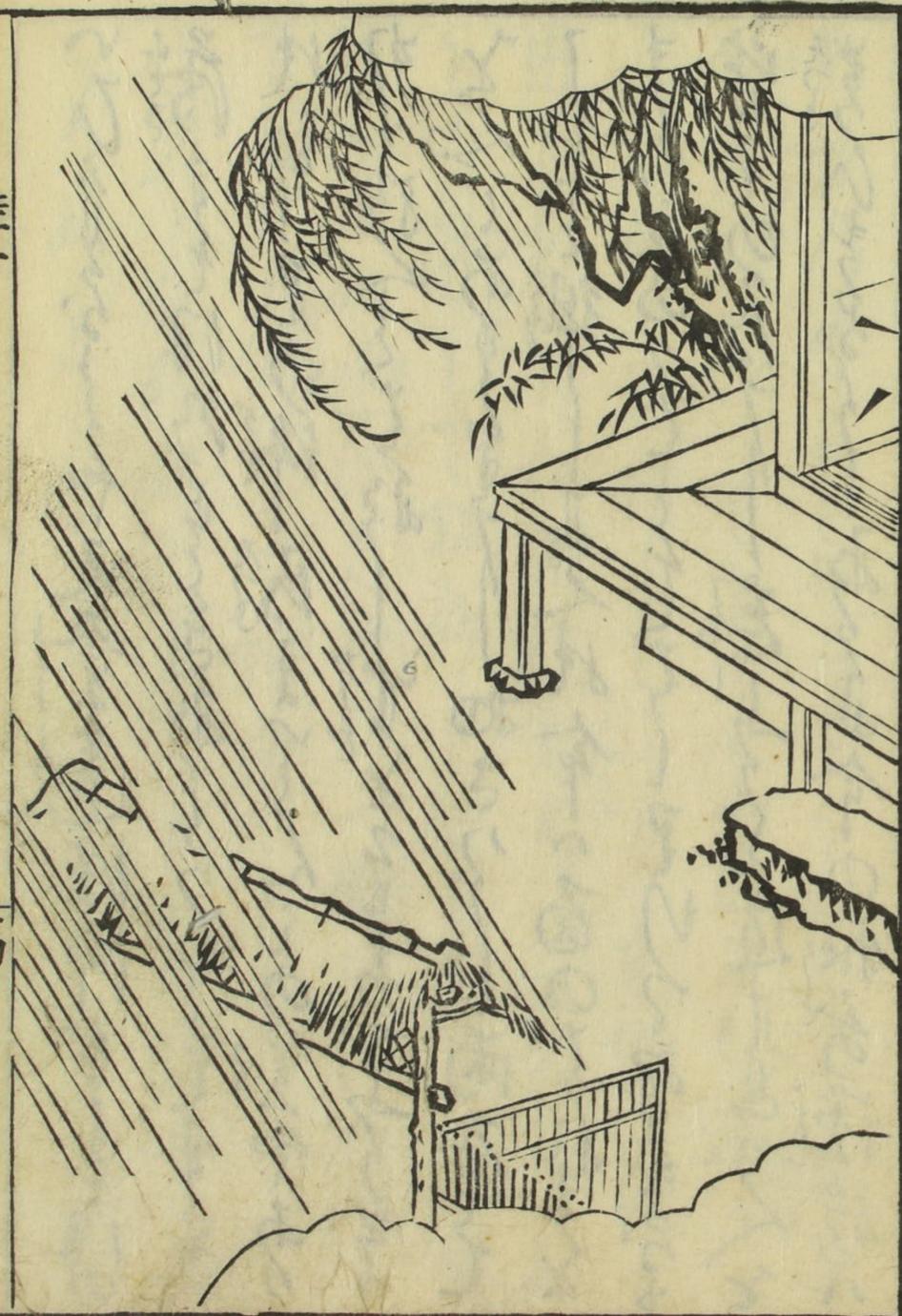
下り。龜のりぐらかりと悪源を養平
手形をはあよとて着副りてそがけ
を今よとり傳へるとい日を同してかる
べうらば心ゆくみそち織横死させら
どしと悼し。又醫者范文正公の曰不為
良於めは醫者と由とみ人任せ死み與ふな
れバ寸口。関上。尺中。み浮沈。至數の脈を以
てけ。人命を奪とて。かふとげとみ
一貼も毒り。相合よぐき事。おの牛。慢

馬勃敗鼓の皮まで蓄畜。用を納て心を
はく。とが醫者。職なり。唐土でもむら
海。不。世。不服。と。茶。と。て。代。續。う。ぬ。醫
者。の。く。ら。り。ハ。あ。ら。う。う。茶。代。と。つ。て。も。の。皮
ざり。に。近。世。ハ。日。乃。出。醫。者。と。し。士。農
工商。外。也。多。術。未。熟。み。て。も。素。人。目
み。目。利。成。ぐ。う。後。好。も。や。り。や。す。と。と
以て。利。欲。り。耽。人。心。ま。げ。何。う。か。天。憲
こそ。げ。て。儒。子。儒。孫。乃。も。相。織。み。勿。祈。と

註三
三

見せりけ。素問。雜傳。内經の論。本草の能毒
不振凍。了して。之。寒ざりりに氣を注ぐ。
茶湯。訛信。小。諷。た。ま。あ。く。乃。心。急。危。方
親。矩。や。袖。中。醫。便。が。乾。乃。摘。合。塩。と。い。ふ
字。ハ。い。れ。も。七。倫。ぞ。と。言。く。多。る。族。も。薑。桂
合。合。と。厚。ん。り。て。た。か。や。上。出。せ。バ。葉。物
醫。師。と。呼。ぶ。ぞ。仕。事。敬。り。遇。も。の。多。し。
い。う。さ。海。中。も。大。切。乃。親。之。中。此。命。を。救。け。て。
せ。他。く。多。る。庸。醫。も。瘵。治。さ。よ。ら。る。ハ。是。未

形。是。を。不。孝。不。慈。み。比。し。と。つ。か。り。け。り。
し。か。り。こ。ま。ハ。多。智。み。あ。ひ。命。を。切。り。け。り。
よ。の。不。便。な。り。と。言。や。病。不。治。は。中。醫。と。は。
の。ま。ぬ。ハ。毒。り。と。言。茶。み。も。た。り。と。ぬ。と。け。り。
右。み。の。よ。し。に。此。形。を。田。舎。り。て。救。醫。
者。無。死。の。地。み。て。ハ。橋。馬。醫。と。呼。ぶ。や。
族。な。り。と。言。又。親。友。も。む。し。ハ。先。身。り。
海。の。ま。ぬ。ハ。少。ん。大。事。に。嗜。り。と。言。て。多。る。
甲。糸。丈。納。云。不。勞。大。切。み。て。す。げ。に。死。ま。る。く



此心作らるるの多し。丈御階ハ清浄
ノ道。昔晋代吳公奢のありし層臺
として。三階五階の善徳を形し。火の見櫓
真下ノ一ノアをわたり。けりあま昇りて内妻
と形し。二ハの峨眉を集け。弾せ唄ハせ。
舞せ形し。よきとて。樂とわたり。つる。暖く
善徳乃り。もくろもありし。荀息とて。子
この是と歎。つらく諫中せとて。終り
形し。志形し。おんろく。築地ハ出衆あり

らん。ヒンヨウ。エイヤとや。うらむ。おんぬまぬ
とわたり。とて。風とらり。よして。つら。れバ
せん。と形して。ハ切まい。と。ある。形。出仕
し。おんろ。と。い。の。後。み。何。に。今日
出仕。此。余。中。み。して。おん。ろ。き。と。後。と。カ。て
ま。つ。て。是。と。四。吐。し。P。さん。と。形。以。念。を。ト
謂。多。ん。バ。吳。公。是。と。中。流。を。る。善。妙。と
中。ハ。ま。の。鶏。印。を。十。か。ま。形。又。その。人。み
碁。石。を。十。お。と。ぬ。ま。に。積。と。ら。か。との。と

尺中めらるつひなれば、夫も大きき一
入真あり。それハチもねり、化ねがら。あぶ
なひものトヤとあやむれば、そのと死荀息
カをた成何どあぶねの業なれば、ねえん
ふりもあぶねハげ、層其臺の太者トて、困
亡。社稷を傾けん兆みて、大トりあぶね
ゆと戯言ゴトト、又陳多る。是未の死、清誓
形り。御清のさる、氣もこれ、近ト。詞、俚語
トして、和歌乃心を、つもの形り。そ、れを

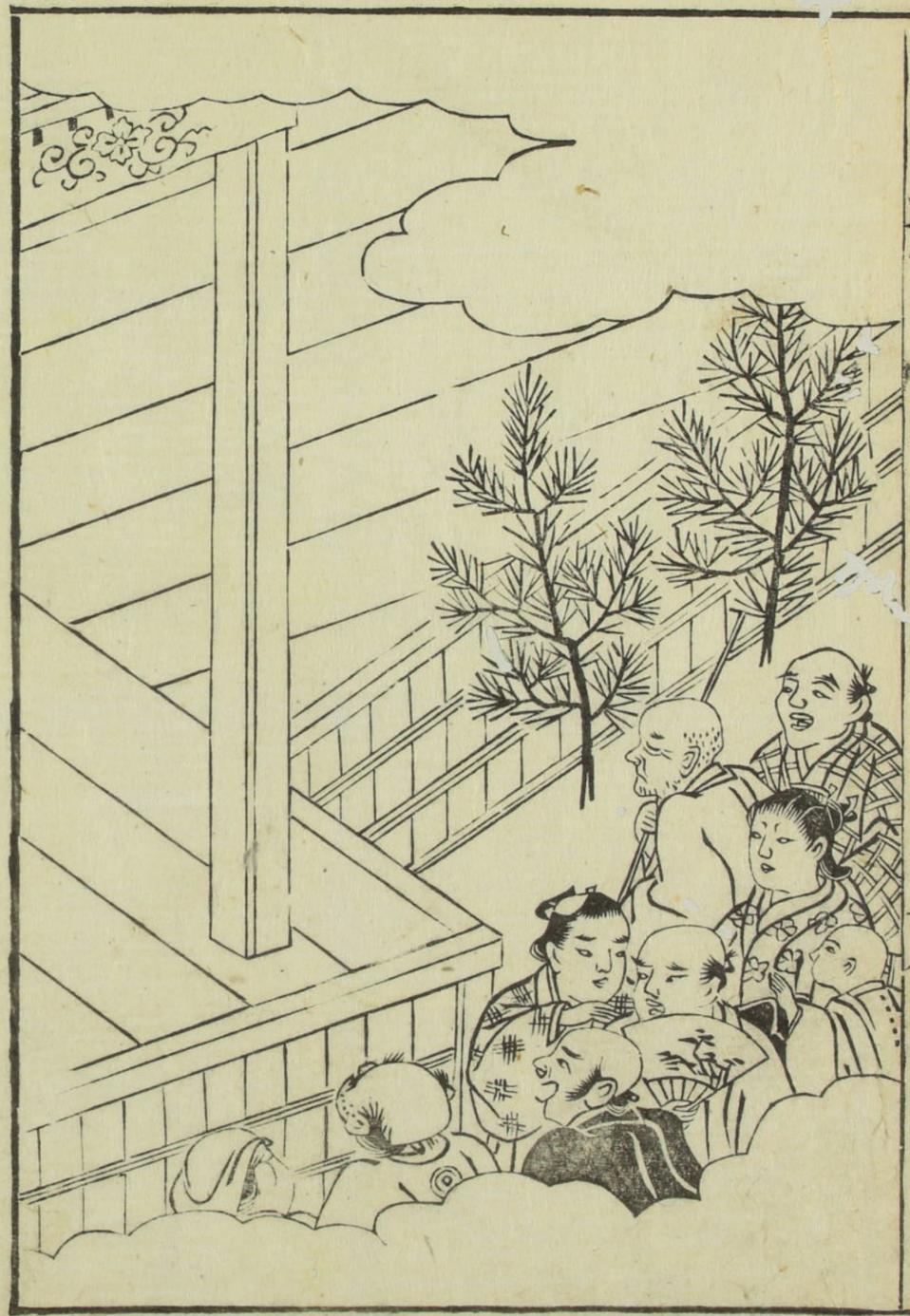
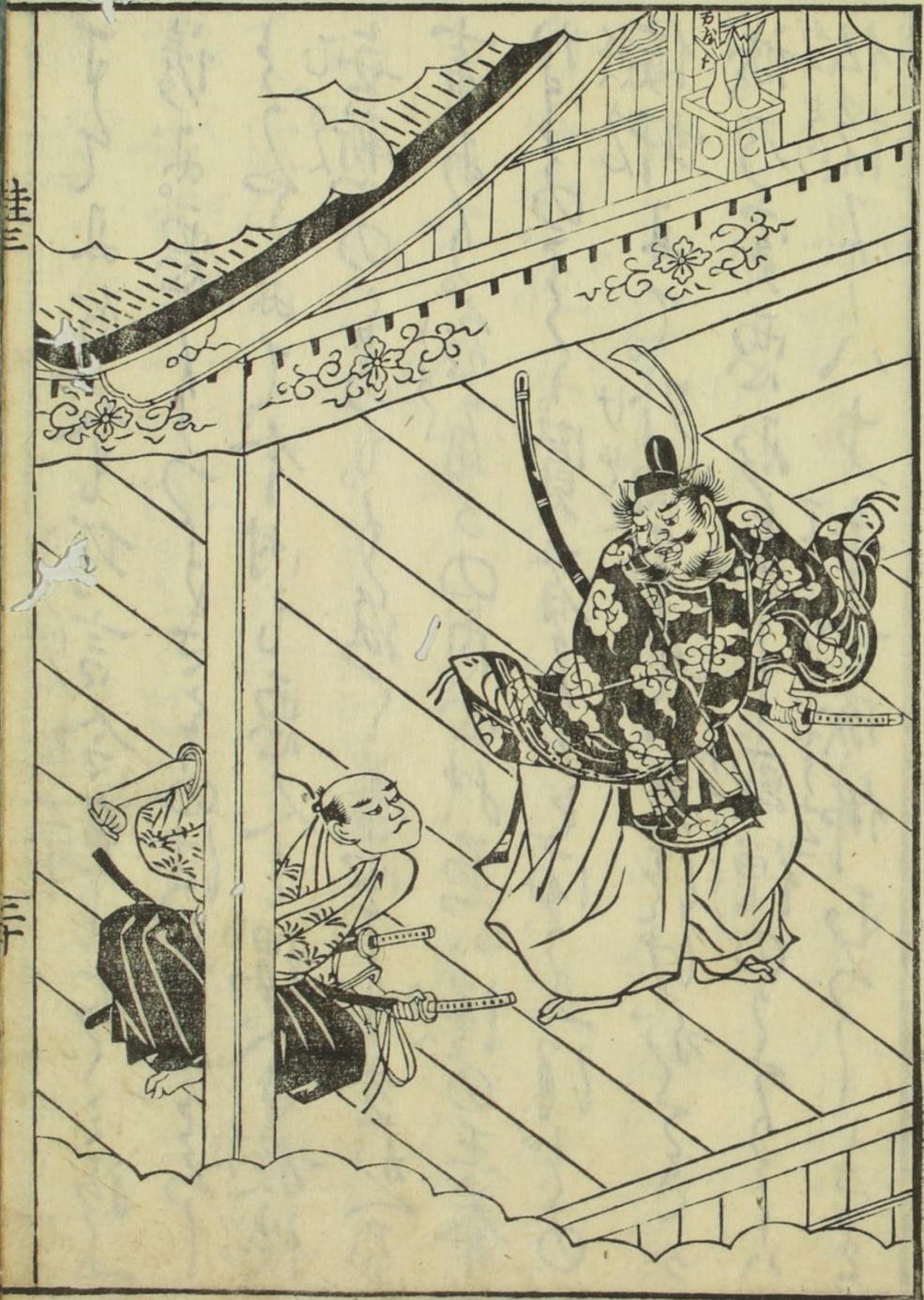
心体、み戯言ねんども。おとひより、半と、此ハ
情ねり。高トり、あつ味、喰のい、唇ト、ま
勺ト、ねりて、さ、と、く、白味、喰、味、丸
句、ト、り、む、を、び、て、角ト、ま、と、ね、ま、係、を
志、と、る、もの、は、胡椒丸の、も、ね、る、ト、。あ、と
猪、栗、の、も、ね、ん、ハ、今、倍、み、謂、秀、勺、出、業、の、
と、ね、戯、言、事、ト、り、る、起、り、な、ま、み、今、ね
能、難、子、と、な、ま、り、と、る、と、あり。是、も、む、ハ
氣、根、つ、く、智、知、て、名、人、と、呼、ば、謠、ハ、女、も

笛鼓を鼓つづみのうたをなるをけんのたかり
 一くはも近ちか世よハすしまむか何なんとおんの形かたちハまの
 風かぜもい内うち百ひゃく番ばんと二之の十じゅう敷しきおほく地拍ちばつ子しも
 合あやあハいびらめだらや若わ菜さい曲きょく之の讀よ物ぶつは
 新あらたトやと天定あてとゆめりて味をあぢぢる
 心こゝろ一い寸すんと存意いと遂にた大おほ鼓つづみの際ハ
 いはれも素す踏ふへ折込おこもつらそうヤらハとり免けハ
 てくけおののと大ききううヤラハとり免けハ
 小こ鼓つづみも曲舞ぶど多く人おほぬ自らはれれ

定てい家か松しょう風ふうをうらりあらる皆人みな此こゝ心こゝろハ合息あ息そ
 一い統けい台たい此こゝ執しつ事じハ形ハ孫あ
 敵てきは乃發はつ明めい 事ことハ形ハ乃發はつ
 傀かい偶ぐより事こと起おこて淨溜じゆ利り標ひょうハ乃發はつ
 一い形かたちハ乃發はつ近ちか世よハすしまむか何なんとおんの形かたちハまの
 多おほく一け排優ゆうとつと心を用む人ハ可也
 堪かん能のう乃の名なとけんや其その理りハ分明めい善ぜん惡あく
 邪じゃ正せい念ねん倚いとり南なん無む阿あ弥い陀た佛ぶつと
 唱となて神明めいと稱し一會くわい念ねんと稱し一又また邪じゃと

註

六



丈夫が一言とつて、も業の心ありものハ
 國の親戚、洗炮で、麻を志して居る、い何
 け賤丈夫。あそ、れ國一心を用る、おど。
 忠臣となつて、國君輔佐の去似比り
 心を流く、なん、松感歎もある、まさを
 物好と六つひおろ、人と生まおろ、悪を
 豹夕の心と、まかハ口惜。子四子曰
 矢人函人豈不仁やと、おとひ合傳り
 性の物去似書之終

